

新・テーブル連続小説 第七話「雪の街」

たとえば、街中を焼き尽くすような激しい山火事に遭うこと。恐ろしい殺人鬼に命を奪われること。戦争で家族と離れ離れになること。紛れもない現実のはずなのに、私はどこか、テレビの中で起こっていることだと思ってしまった。名前も知らない外国の人たちが嘆き悲しんでいる映像を見て多少胸は痛むけど、自分の身に置き換えて考えるところまでは至らない。心のどこかで「自分は当事者にならない」という変な自信さえ持っていた。九月の震災と大停電を体験するまでは。

「女だって今や自立する時代よ。男に頼って、陰に隠れて生きていく時代は終わったの。だから私は一人でも強く生きていく……なんて思っていたけど、さすがに震災の夜は心細かったわ」

あの日の恐怖はきっと老若男女関係なく心の刻まれたと思う。命の危険が迫っていたわけではないけれど、あの時から私はようやく災害や戦禍に怯える人々が絵空事じゃないって、真剣にわかった気がする。やっぱり自分が体験しないと、綺麗事さうまく言えそうにない。

「そういう時には、俺みたいなのを相棒にしてくれたらちゃんと守れたよ、その不安から」

「身をもって体感することの重要性和、備えあれば憂いなしが真実だって、あの時肝に銘じたわよ」

ハイブリッド車ならどの車も当たり前のように低燃費。SUVだから当然のようにパワフルに悪路も走れる。アウトランダーPHEVのすごいところは、当たり前前のことが当たり前前に出来ることだけじゃない。低燃費で走りながら大きな電池に溜め込んだ電力を自宅の電力として使えるハイブリッド車が他にあるだろうか。電力によるモーターの働きで険しいラリーコースを走破できるSUVが他にあるだろうか。アウトランダーPHEVがデビューしてもうじき6年になるうとしていいるが、発売当初から今日まで、最初から今までの分野におけるライバルなどいない。ダフに走れて家庭で役立つプラグインハイブリッドSUVなんて他にはない。よくデリカD5こそ唯一無二の車といわれているが、アウトランダーPHEVもまた唯一無二の存在なんだ。

「人間は一人じゃ生きられないの。不安な時には支えてくれる、安らぎが必要なよ……あなたみたいだね」

「へへ、そんなに頼られたら照れちゃうなあ」

私たちが今いるのは、北海道三菱のショールーム。今ちょうど、復興支援フェアという売上の一部を義捐金として寄付するという催しをしているそうだ。

「マフラー防錆塗装と年越し点検が終わったら、ちょっと余市まで走りに行きましょう。後志自動車道、通ってみよう」

「え、大丈夫かい？冬の高速は怖いって言ってただろ？」

「何言ってるのよ、あなたがいけば安心よ。今の私は、かっこよくて、役立って、安心させてくれるアウトランダーPHEVのオーナーなんだから」

「そっか……、うん、そうこなくちゃね」

いつもより遅い降雪は、まるで未来を祝福する天使の羽根かのように降り注いでいた。彼——私の愛車・アウトランダーPHEVは、雪原の彼方の穢れない世界へ誘おうと、私を待っている。



雪は、
はかなくきらめいて。